

— 告 告 —



吉良 朋晃

金沢工業大学大学院工学研究科  
電気電子工学専攻  
博士前期課程二年  
愛知県立天白高等学校出身

# 気づけば父の背中を追い、 カーエンジニアの道へ。

子どもの頃、父とよく外で遊んだと話す吉良さん。まだ日向水には遠い早苗月、田んぼに入れた足が泥に沈んだ瞬間、暖かさに変わった皮膚感覚の記憶が、デリケートさを要求される今の研究にも生きてくるのだろう。

彼が取り組むのは、植物の生理活性をリアルタイムで追う磁気計測である。磁性を帯びた液体を吸収させ、外部から光刺激を与えた時、植物の体内で液体がどう移動するかを高感度の磁気センサを使って捉える。従来はデイスボ電極を茎や葉につけて測るため、生育に影響が出るほか、長期間、安定的に計測するのが難しいという課題を、初めてブレイクスルーしたのだった。

「温暖化や異常気象、担い手不

足など、農業を取り巻く状況が厳しさを増し、均質で安定した収量が見込める植物工場への関心が高まっています。生体情報を正確、迅速、長期的に測り、栽培環境にフィードバックすることが、ますます重要になってくるでしょう」

この研究成果をまとめ、昨年の日本生物環境工学会東海支部・北信越支部合同の「学生のための研究発表会」で優秀発表賞も手にしたが、これから目指す進路は同じ電気信号でも、植物でなく車というから面白い。「電気信号でタイヤ角を変える、完全に電子制御されたステアリングの開発に携わりたいですね」。

理由を探ると、家で仕事の話はしなかったという父の背中を、いつしか追いかけている吉良さんがいた。父は大手自動車部品メーカーの研究部門で働き、工場見学にも連れて行ってくれたそうだ。この時、芽生えたモノづくりへの好

奇心が、今日の彼の土台でもある。

ただ、父は自身が歩いた道無理強いしなかった。大好きなアウトドアへ息子を誘い、興味を持ったものを親として静かに見守った。その一つが、伊勢湾最奥部の愛知県西部に広がる藤前干潟の保全活動だ。小学校四年生から参加し、現在は環境学習プログラムの企画や後輩の育成に力を注いでいる。

「ドライバー不足や過疎地での高齢者の移動が社会問題となっています。自動運転に欠かせない技術に挑戦する自分に期待しています」。自然に親しみ、小さな命を慈しむ吉良さんを見ると、技術は住みよい社会をつくるためにあるとの熱意が伝わってくる。それは、建学以来、KITが科学技術者倫理教育を重視してきた意義と、見事なほどシンクロしている。

## 金沢工業大学

石川県野々市市扇が丘五七-1  
電話番号(076)21481100

KIT  
キャンパス  
レポート  
文・杉村裕之